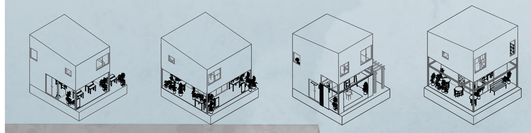
# 連結する住居ユニット

## 住居ユニット×1 ⟷ 小さな庭

土地間と建物内の二つの境界を“耕した”住居ユニットを４つ設計した。それぞれの住宅ユニットは、居住人数や階数が異なるものとなっている。いずれのユニットも職住一体の暮らしを想定した建物になっている。

### 4 種類の住居ユニット

1 階部分がキッチンとダイニングを兼ねた店舗スペースで、2 階部分は住居空間となっている。そして、上下階を繋ぐように、スキップフロアを配置している。



## 住居ユニット×2 ⟷ 共同の袋小路

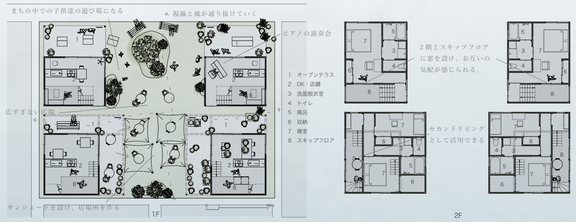
住居ユニットが二つ連結することによって、共同の袋小路が発生する。それぞれの住民の商いの場になり、建物の境界に光と緑をもたらし、街にい新たな境界を作り出す。

### 庭が結合し、袋小路となる

住居ユニットが連結することによって、新たな境界が線になる。

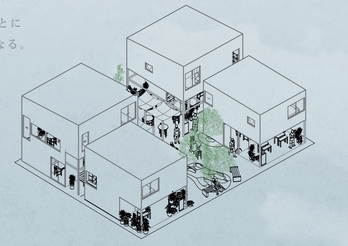
## 住居ユニット×4 ⟷ 共同の広場

袋小路を有した住居ユニットが４つ連結することによって、共同の広場が発生する。住民が広場を介して、商いを展開していく。また、ここに住む人達のための広場だけでなく、近隣住民に対しても公園のような憩いの場所としても機能し、様々な人々が集う空間となる。



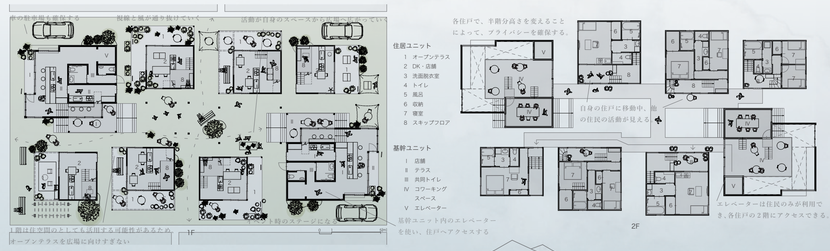

### 袋小路が結合し、広場となる

住居ユニットが連結することによって、新たな境界が面になる。



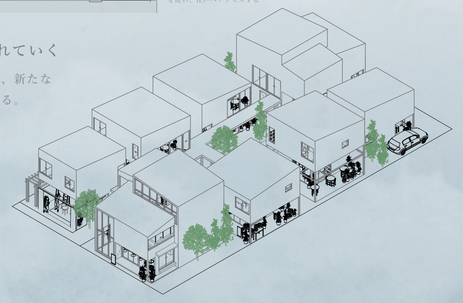
## 住居ユニット×6＋基幹ユニット ⟷ 共同の広場とコミュニティ

住居ユニットが６つ以上連結すると、広場の空間活用と住民の統率が困難になる。そこで、それらの中心となるような“基幹ユニット”を提案する。この基幹ユニットには店舗の他、共同トイレ、エレベーター、コワーキングスペースなどの機能を有している。この基幹ユニットは、言わば、街に開かれたエントランスであり、住宅群の仕組みが整えられ、コミュニティ形成が促進されていく役割を持つ。




### 広場が連なり、まちが耕耘されていく

住居ユニットが連結することによって、新たな境界が道になり、耕された空間が広がる。



# まちを耕耘する

資本主義に苛まれた都市空間では効率とコスト優位に“踏み固められた”土地と建築が残り、
互いを断絶し合う境界が残った。そんな境界を緩やかにほぐす、すなわち、“耕す”操作を行う。

## 01 建物が林立する都市空間

現在の都市、特に商店街を始めとした商業集積地区においては最大の建蔽率で建物が建てられ、建物と建物が断絶し合う境界が見られる。そのような境界によって、人の繋がりも希薄化している。さらに、建物の更新が起きる際、建物で断絶される続けるという悪循環が起こる。

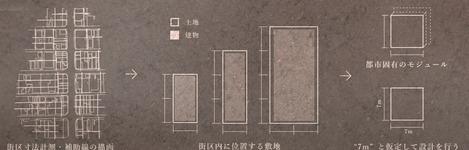
分断された空間で人々の繋がりも分断

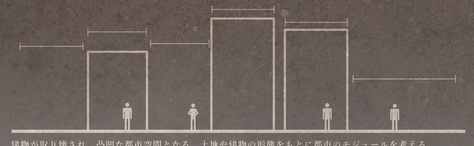
**従来の空間** 建物の更新起こる際、断絶された境界が出来続ける悪循環が起こる。

建物が林立し、建物と建物が断絶し合う境界となっている都市空間。人々の繋がりも断絶される。

## 02 都市をモジュール化する

都市空間には、土地や建物のスケールから位置付けられる固有のモジュールがあるのではないかという仮説を立てた。街区や建物の寸法の計測、建物と土地の形態から補助線を描画することによって、都市のモジュールの算出を試みる。そのモジュールを活用することによって、建物単体だけでなく、建物の集合体の“都市”として、良好な空間を形成することができる。今回は、“7m”を最小寸法とするモジュールを用いて、設計を行っていく。

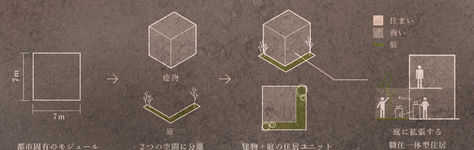


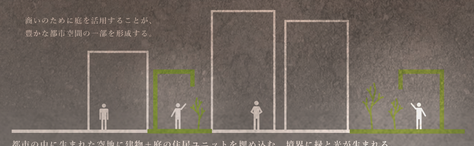



建物が取り壊され、凸凹な都市空間となる。土地や建物の形態をもとに都市のモジュールを考える。

## 03 建物＋庭で住居ユニットを形成

算出した都市固有のモジュールに住居＋庭の住居ユニットを埋め込む。この時の建蔽率は大幅に低く設定し、建物のボリュームを減らしていくことによって、境界に余白が生まれていく。これまで都市空間内の多くを建物が占めていたが、住民が手入れを行う庭や住居から滲み出る活動自体が都市空間を形成していく。また、この住居は職住一体型住居で、日常生活や趣味の延長で商いを行うことで人々の交流やコミュニティ形成を目指す。

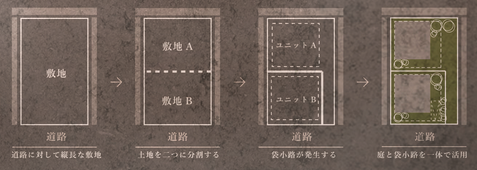



都市の中に生まれた空地に建物＋庭の住居ユニットを埋め込む。境界に緑と光が生まれる。

## 04 土地の分割による袋小路の発生

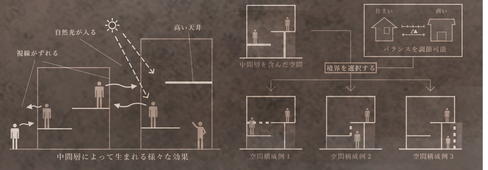
商業集積地区においては、間口が狭く、奥行きが長い縦長の土地が広がる。その土地を手前と奥側の二つに分割する。奥側の敷地は接道義務が生まれるため、敷地Ｂが2m オフセットする。そこに、前述した建物＋庭のユニットを埋め込むと、ユニットＡの建物には接道義務が生じ、境界に余白が生まれる。ユニット内にある庭と接道義務によって生まれた袋小路を連携して利用する。新たな境界に“奥行き”が生まれ、人々の活動が滲み出す空間となる。



縦長に敷地を分割することにより、新たな境界に奥行きが生まれる。

## 05 住まい・商い・庭を繋げる中間領域

建物内に中間階を設けることにより、上下階の境界を緩やかにする。そうすることで、商いと住まいのバランスを住民自身が調整し、建物全体を一体として活用できたり、日常生活の延長で商いを行うこともできる。他の効果として、建物使用者や通行人の視線がずれ、人の気配が感じられる空間となる。また、建物内で、天井の高い空間が作れたり、太陽光を建物内と建物間に自然に誘導したりでき、奥行きの生まれた新たな境界に、快適さをもたらす。



中間層を設け、耕された境界にさらなる快適さをもたらす。